

# 城北



平成 29 年 9 月 1 日 現在	
総世帯数	3,574
総人口	7,682
男	3,665
女	4,017

城北人物  
風土記

松商学園  
昭和の名将

## 池田 政雄



在りし日の池田監督

松商学園硬式野球部は、今年 9 年ぶりに夏の甲子園大会へ出場し念願の 1 勝をあげ、平成 27 年 10 月に 81 歳で亡くなられた、蟻ヶ崎北町会の池田政雄さんの 3 回忌に花を添えました。

昭和 40 年代後半、野球部は低迷し監督交代が続き成績不信にもがいていました。そこに白羽の矢がたち新監督に迎えられたのが、OB の池田政雄さんでした。

昭和 50 年 (1975) 高野部長とのコンビで予選を勝ち進み、就任 1 年目にして 6 年

ぶりの甲子園出場 26 回目を決めると、それから 6 年連続出場の大会新記録をうちたて、みごとに復活と常勝チームに育てました。

池田さんは昭和 25 年に入

学、1 年からレギュラーとなり、俊足、好守、巧打の外野手として夏 3 年連続、主将として春の選抜大会に出場しました。20 年代黄金期の一翼を担い、進学した明治大学では「高岡野球」を学び、卒業後はタクシー会社に勤務していました。

母校での指導は厳しいものでしたが、会社員時代に培った経験は全部員をまとめる原点ともなり、多くの名選手を送り出しました。その一方でベンチ入りできなかった 3 年生の進路にも心配りをする人

でした。8 年間で監督を退任しましたがその精神は教え子に引き継がれ、多くが指導者として今も野球に携わっています。

一見、豪放磊落な印象の人と言われていますが、自ら磨き上げた 3 足の革靴を使い分け、ズボンのアイロンがけを欠かさなかったなど意外に几帳面な逸話も伝わっています。

信濃グランセローズ役員の飯島泰臣さんは「この馬鹿小僧! と叱られた声は忘れませ

ん。その厳しい教えがあったからこそ、明治大学で主将を務め、今も野球に関わっています。先生の教えは私の人生の礎です」と。また、監督を引き継ぎ今は母校の教頭を務める小尾淳美さんは「昭和 52 年甲子園出場が決まり、ベン



右から 2 人目 甲子園での池田監督

チ入りできない選手も含め 3 年生 (13 人) 全員を大阪へ連れて行ってほしいと頼みに監督の自宅を訪ねた時、松商の監督だけはなるもんじやない、と本音を漏らしたことを覚えています。勝負師池田ではなく人間池田の素顔を見たような気がします。弱みなど決して見せなかった監督がより身近に感じられた一瞬でした」と思い出を語っています。

教え子たちは池田監督との親睦会「甲池会」を毎年続けてきました。今年も年末に恩師を偲んで開かれるそうです。

### またひとつの町会へ 同心町と口張町

城北地区の東北に当たる同心町と口張町は、合わせて 80 世帯余の住民のうち町会に加入している世帯が約半分に減るとともに、少子高齢化もあって役員の選出や町会の運営などが困難になっていま

した。

このため両町会では、一昨年から合併に向けての検討委員会を発足させる一方、住民アンケートを行い、90 割の住民の賛成を得ました。

これを受けて両町会では、合併協議委員会を正式に発足

させ合併に伴う新しい町会の名称を同心口張町会と決定するとともに規約の改正など 103 項目にのぼる合併に伴う事業の検討を進めてきました。

両町会では、9 月 10 日に全戸総会を開き、住民の意思を確認した上、来年 4 月 1 日を目途に合併を進めることになりました。

同心町と口張町は、戦後間もなく迄ひとつの町会でしたが、戦後 2 つの町会に分かれそれぞれ独立した町会として活動してきたもので、再びひとつの町会として運営されることになりました。

松本市では、平成 27 年に梓川地区で、また平成 28 年に安曇地区で町会の合併がありました。市街地での同心町と口張町の合併は初めてです。



総会風景

『平和を語る会』

特攻隊の思い出と戦後

主催 城北人権推進協議会



8月8日、陸軍の特攻隊要員だった丸山重雄さんの講演会が開かれました。

丸山さん(深志三丁目)は東御市の出身で今年92歳。会場に展示された自筆の書や映画に囲まれ、あの時代の背景を模型の飛行機やスローガンなどを示しながら淡々と話しました。

○少年飛行兵に志願

太平洋戦争が始まった翌年の昭和17年、丸山さんは、お国のためにとの思いで親に内緒で少年飛行兵に志願しました。筆記試験や適正検査などに合格し、立川や宇都宮の飛行学校などで速成の教育を受けました。そして、昭和19年に戦闘要員として中国に渡り、ここでも厳しい訓練が続いたある日「捕まれば殺され

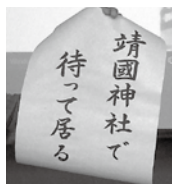
る」と言われた中国軍支配地のコウリヤン畑に墜落してしまいました。横転した飛行機の下から必死の思いで脱出し、数時間後に味方の捜索隊に救助されました。

○特別攻撃隊要員に

太平洋戦争は、ミッドウエー海戦での大敗後、敗戦続きでした。

マリアナ海戦で連合艦隊と航空兵力が壊滅的な打撃を受けると、海軍は航空機に爆弾を搭載して、一機必中の敵艦に体当たりするいわゆる「特攻隊」を創設するとともに人間魚雷や水中爆弾などの製造を始めました。しかし、戦況は本土周辺に迫る一方でした。こうした戦況に陸軍でも特攻が始められ、丸山さんは、昭和20年3月に形ばかりの志願の名の下に否応なく特攻隊員にさせられ、文例通り遺書を書きました。そして、共に訓練した仲間たちが次々に散って行く中で8月15日の終戦を迎えました。丸山さんは、自失茫然とし、ただただ軍刀を振り回し辺りの木に打ち付けました。

終戦後丸山さんは、中華



民国の國府軍に参加しましたが、翌年米軍が視察に来ると「カミカゼ」は危険だという理由で昭和21年6月に日本に強制送還されました。

○戦友の供養と社会奉仕へ  
帰国したものの特攻崩れと世間の目が恥ずかしく外へも出れない毎日でした。折よく発足したばかりの警察予備隊(現自衛隊)へ逃げるようにして入隊、除隊の後民間の会社に就職しました。

かねてから戦争で散った同期の者の供養をしなければならぬ責務があるとの思いから、予備隊を通して習った書や仏画を携え、あの悪夢のような時代を語り継ぐとともに、社会奉仕へも積極的に取り組みました。

また中国語を勉強し、中国帰国子女の生活支援や中国河北省の病院開設に協力する一方、オリンピックのボランティア・ホームステイの受け入れなどもしてきました。

丸山さんは最後に「戦争は人命軽視の悲惨なものだ。絶対にやってはいけない」と訴えました。

話を聞いたひとりには「丸山さんの活動は、自身の心にか大きな力が働いたのですね」と話していました。

沢村夏祭り

